

## 日本歯科心身医学会の発会にあたって

第1回日本歯科心身医学会会長

内田安信

病を癒し患者の心を安んずることが疾病を治療する上で最も大切であり、それは古今東西繰り返し書きはやされて今日に及んでいる。医学・歯科医学の細分化と急速な発展は目覚ましく、ややもすると最先端の器機を使用しての治療や研究が優位に立つあまり、患者の病める心をついぞ見失いがちになることも多い。その反省をこめて、近時心身医学がその必要性の上からも、ニーズに応える形で治療学としての基盤をかためつつ、改めて目を見張る進歩発展を迎えている。

全人的な治療、それは心身一如の立場から、身体医学に偏せず心理に傾斜せず、病める患者を総合医学的に治療する立場であり、これこそがこれからの患者治療医学の基盤であり中軸であらねばならないものと思われる。従来、歯科医療は少しく理化学的治療にウェイトがかかり過ぎていたきらいがあり、治療器材の進歩に伴う処置法の改善完璧化と相俟って、当然のことながら最近患者の心理の理解とその対応へのニーズが、いまここに湧出してきたとあってよい。

医科ではすでに昭和35年日本精神身体医学会が発足し、ストレス社会を反映し激増する心身症患者に対し、遅しい治療の手が差しのべられて久しい。

歯科領域にも昭和27年その兆しがあり、医科と共同して患者診療の情報を交換し、その基礎的臨床的研究は徐々ではあるが進められていたのである。ただし歯科領域は医科と異なり治療や処置の上で特殊性があり、どうしても歯科医学をおさめた歯科医でなければ治療の場における患者理解は困難であるとの考え方も、臨床の実際上考え方としてにじみ出ており、それは至極当然かと思われる。当該領域の医療万般を知悉した医師が担当医となることは心身医学的治療の原則であるからである。

時あたかも機熟すの感があり、昭和60年9月24日、私が主宰した第30回日本口腔外科学会総会を契機に、歯科領域でも心身医学研鑽の風潮が台頭し、同学の士、相集い日本歯科心身医学会が正式に発会することが決定されたのである。

越えて本年、昭和60年7月12日、東京において、第1回日本歯科心身医学会総会が開催された。多数の会員の皆様の入会を得て、池見西次郎九大名誉教授の「歯科心身医学の歴史と展望」と題する教育講演を中心に、一般演題の発表があり、それが堰を切ったように陸続と熱心な質疑応答を以って、極めて盛会裡に開催された。このことは、多くの歯科医が心身症の治療や意見の交換を渴望しそのアプローチに如何に精魂を尽しているかが如実に反映されて、極めて頼もしく同慶の至りと考えられる。正に歯科心身医学の曙光は大きく光り輝やき、今後太陽の如く光彩を放つものと思われ、歴史的な開幕で、記録に残る快挙となったわけである。

私は本学会発会の経緯を顧みて、心身医学を専攻する大学関係の臨床歯科医、開業歯科医、基礎歯学の研究に携わる歯科医を、三位一体とする総合歯科医学の学会として、その道は細

くとも長く永遠にその志の灯をともして、心を通じあい、知識や情報を交換し親睦を旨とする学会に致すべく、お互い力を出しあっていきたいものと思う。それは必ずや可能であり、会員の皆様の意向もここに集約されているものと思われる。本学会発会に当り日本心身医学会の池見理事長のご講演をいただき、その他学会幹部の方の祝電なども寄せられ、我々の日本歯科心身医学会は、日本心身医学会ともども車の両輪の如く、今後将来を展望し、患者の真の幸福を願って、心身医学の臨床や研究に限りない情熱を傾け、発展していきたいものと考えている。

最後に臨み、本学会発会に漕ぎつけるまでに、数々のご尽力を惜しまれなかった世話人の先生方、そして発起人の諸先生方に、第1回総会担当大学の責任者として、心から厚く感謝の意を表しお礼を申し上げ、併せて会員の皆様方の益々のご健勝を祈念して、巻頭の言葉と致したい。(昭和61年7月12日)